

キーワード：情報を受信・発信する力、自分事として捉える、教科等横断的な情報モラル教育

## I 研究について

### 1 情報モラル教育に関しての学校課題

湖南小中学校の後期課程では、スマートフォンやゲーム類の所有率が高く、それらに接している時間も長い。また、SNSやオンラインゲームなどの利用率も高く、それらでコミュニケーションを取っている生徒もいる。さらに、フィルタリングがかかっていない機器も多く、誰とでも情報交換ができる状況で、メディア機器の使用やモラルに関しての問題に多くの課題を抱えている。4月に実施した学校生活アンケートによると、SNS等を利用して「嫌な気持ちになった」と回答した生徒の割合が80%を超える学級もあった。一方、情報機器を活用した学習は「楽しい」と感じている生徒の割合が90%を超える学級もあった。今後、情報機器を正しく活用していくためには、機器の特性をよく理解しながら、送り手側と受け手側の両方の立場を踏まえた正しい判断力が身につくように学校や家庭が情報モラル教育の推進に努め、より一層の協力体制を構築しなければならない。また、情報機器を取り扱う上では、正しい情報機器の使い方がより一層求められる。

### 2 実践概要（授業実践、授業研究会等）

時 期	実 施 内 容
5月26日	第1回 校内研修「メディアリテラシー育成事業の方向性」について
	第2回 校内研修「生徒・保護者アンケート」について
6月16日	○ 生徒のメディア使用状況及び保護者のメディア意識調査
6月下旬	第3回 校内研修「教材の作成」について
7月 1日	○ 研究授業（7年 学級活動）
7月15日	○ ふくしま情報モラル教育アドバイザーによる講演会（生徒対象）
	第4回 校内研修「情報教育全体計画」について
9月 1日	第5回 校内研修「教材の作成」について
11月10日	○ 研究授業（9年 国語科）
11月16日	○ ふくしま情報モラル教育アドバイザーによる講演会（教師対象）
11月30日	○ 令和3年度ふくしま教育創造コンソーシアムでの発表
12月 1日	第6回 校内研修「実践のまとめ」について
12月 6日	○ 令和3年度ふくしま「未来の教室」地区別研究協議会で発表

### 3 全体計画

「令和3年度 次世代のためのメディアリテラシー育成事業」を実施するにあたり、本校での「令和3年度 次世代のためのメディアリテラシー育成事業実施グランドデザイン」を作成した。

### 4 年間指導計画

年間指導計画については、これまでの学級活動や道徳科での情報モラル教育の実践に加え、国語科や技術科での教科等横断的な情報モラル教育を、各学年の年間指導計画に組み込んだ。

## Ⅱ 研究の実際について

### 1 校内授業研究会での実践等

本校の「令和3年度 次世代のためのメディアリテラシー育成事業実施グランドデザイン」に基づき、今年度は「犯罪被害を含む危機を回避できる力」「受け手の状況を踏まえて発信する力」「責任をもって適切に情報を扱う力」を身につけさせるため年2回の授業実践を行った。さらに、授業実践を踏まえ、他の学年でも実践を行うようにした。また、「令和3年度 情報モラル教育 年間指導計画」についても、学級活動や道徳科だけではなく、教科等横断的に情報モラル教育をするように見直した。

本校の実態としては、生徒のICT機器が充実しておりICTの活用率が高い。また、スマートフォンやタブレットの所持率が高く、使用時間も長い。過去には、SNS等を通して、見知らぬ人との交流やオンラインゲームによる金銭のやりとり、仲間はずれなどのトラブルがあった。この背景としては、湖南小中学校の学区が広く、生徒間の家も離れているため、放課後や休日に友達と遊ぶ機会が少ないことも1つの要因となっている。そのため、スマートフォンやタブレット、オンラインゲームなどを介して、友達と遊んだり、交流したりしていると考えられる。

#### (1) 第7学年 学級活動「SNSを上手に活用するためには」(7月15日)

##### ① SNSなどでの誹謗中傷による被害の現状

中学生がSNSなどでのいじめを受けたり、芸能人がSNSなどで見知らぬ人から誹謗中傷を受けたりして自殺してしまったことを話し、SNSやオンラインゲームなどで誹謗中傷がある現状を把握した。SNSやオンラインゲームなどのチャット機能によって人を傷つけてしまう危険性があるということを理解できた。

## ② 発信する力

文部科学省のYouTubeチャンネルにアップロードされている「情報化社会の新たな問題を考えるための教材」の動画教材②「思ったままSNSに送信しただけなのに」を使用した。その内容は、SNSの発信によって、自分が加害者にも被害者にもなってしまうというものであった。



この動画を視聴し、SNSを発信する際に自分だったらトラブルを起こさないためにどのように発信すればよいかを考えることができた。生徒たちからは、意見を交換していく中で、「この内容はSNSに書く必要があるのかな。」や「私だったらもっと違う言葉で投稿するかな。」等の発言が聞かれ、問題点を自分事として捉えることができていた。

## ③ 受信する力

フェイクニュースやSNSでの他人の発言を信じてしまい、嘘の情報をさらに拡散させてしまい、自分が誹謗中傷を浴びるといった話を視聴した。どのようにすればそのようなことにならなかったのか、自分だったらどうしていたかを考えることができた。



・発信する前に友達に確認してみたり、オフィシャルサイトを見たりして正確な情報を見つける。  
・批判されたら、とりまえずすまぬかに謝る。

・発信する前に、その発信をした後のメリットとデメリットを考える。  
(自分にプラスになるかマイナスになるか)

## (2) 第9学年 国語科「報道文を比較して読もう」の実際 (11月16日)

情報モラル教育を、これまでは道徳科や学級活動などで取り扱うことが多かった。今回の実践では、このような実施状況を踏まえ、教科等横断的な情報モラル教育を行うために、国語科での授業実践を行った。

### ① 教科等横断的な情報モラル教育

国語科の授業で情報モラル教育を取り入れた。「情報社会を生きる」というネットニュースや新聞記事などを見て、情報の発信方法などの違いについて考える単元である。そのなかで情報の発信者の意図や書き手による表現の違いに気付き、情報の客観性や信憑性について考えを深めることができた。

3	情報の内容に合わせてトピックのタイトルを考える。 (ニュースの内容) 福岡小中学校で校則検討委員会が立ち上がった。 ・ニュースの詳しい内容を確認し、情報の受信者にタイトルからクリックして内容画面にたどりつけるためには、どのような表現が良いか考える。	15	○ 生徒たちもよく目にする「Yahoo!のニューストピックス」をまわって、発信者としての立場を味わせることで本時の活動に意欲を持たせるようにする。 ○ ニュースは事実のみを伝え、生徒一人一人の思いや考えを反映できるようにする。 ○ トップページにおけるタイトルの条件を伝え、条件に合った形でタイトルを考えさせる。 ○ 考えたタイトルはロイノートで提出させ、提出状況を把握できるようにする。 ◇ 条件に合わせてタイトルを考えることができる。(ロイノート) ◇ 積極的に発信者の立場になってニュースタイトルを考えようとしている。(健助) ○ ニューナーの受信者の立場として「どのタイトルならクリックしてその先のニュースの内容を読みたいと思うか」という視点で選ばせる。 ○ 発信者・受信者、それぞれの立場の考えを聞くことにより、情報の背後にはそれぞれの思いや考え、原因があることに気づかせる。
4	考えたタイトルを全体で共有し、皆が選ばれるタイトル4つを選ぶ。	5	
5	選ばれたタイトルを考え、選んだ人たちの考えを聞く。 ・ どのような考えや思いでそのタイトルにしたのか(発信者の思い・意図) ・ どんな点に惹かれてそのタイトルを選んだのか(受信者の印象・受け取り方)	10	
6	本時の内容を振り返り、課題に対してのまとめを書く。 ○ 発信される情報は、発信者の思いや考え、意図をもとに発信される。 ○ 私たちは、発信される情報の表現の印象を基準にして情報を受け取っている。 → つまり情報は発信者によって操作することが可能である。	7	○ 5を受けて、課題に対してのまとめを書かせる。 ○ 発信される情報は発信者の思いや意図が含まれること、受信者は表現の印象によって情報を選び取っていることに気づくことができる。(ワ クーン) ○ 生徒のまとめを受けて、さらに活動に向けて「情報」についてのまとめを行う。 ○ 次時は新聞の記事を比較検討することを伝え、興味を高める。

### ② 情報の発信

ネットニュースや報道文の見出しは、どのような意図があってつけられているのかを考えた。学校での、最近の出来事を「Konan ニューストピックス」として取り上げ、情報の内容を捉えた上で、読み手を惹きつけるトピックのタイトルを考えさせた。ネットニュースの特徴を知り、ニューストピックスのタイトルを考え、発信者の立場となることで、受信者にどのような言葉で伝えればより上手く伝わるかを具体的な体験を通して、自分事として捉えることができた。



### ③ 情報の受信

自分で考えたタイトルを友達と共有し、受信者の立場として、「どのタイトルならその先のニュースの内容を読みたいと思うか」という視点で、比較させた。比較検討することで、情報の発信者の意図や表現によって受け取り方に違いがでることに気付くことができた。発信される情報には発信者の思いや意図が含まれ、受信者はタイトルの印象によって情報を選び取っていることに気付くことができた。「情報は発信者によって操作することが可能であること」について理解を深めることができた。



## 2 情報モラル講演会の様子

### (1) 第1回情報モラル講演会（生徒対象） 令和3年7月15日

講師 郡山女子大学 短期大学部 地域創成学科 准教授 山口 猛 様

第1回情報モラル講演会として、山口先生から生徒に「自分を守る」「うそにだまされない」「AIに負けるな」の3つのことについて、お話していただいた。特に「自分を守る」という話では、「ミルグラム実験」という話を紹介していただき、閉鎖的な状況下でのSNS機器の使用の際の危険性について話していただいた。



その結果、生徒にSNSやオンラインゲームが犯罪の入り口になる恐れがあることに気付かせることができた。具体的な実験結果をもとにした話や生徒の現状に即した話であったため、生徒の理解が深まった。

### (2) 第2回情報モラル講演会（教員対象） 令和3年11月16日

講師 郡山女子大学 短期大学部 地域創成学科 准教授 山口 猛 様

第2回の情報モラル講演会として、山口先生から教員対象にお話をしていただいた。本校の学校行事や校内の活動の中で、どのような場面において情報モラル教育を行っていきけるかということについてお話していただいた。また、他県での情報モラル教育の事例や「SNSノート」、「ネット利用診断サービス」の活用方法についても紹介していただいた。「情報モラル教育は大事だ」と思っているが「実際に情報モラル教育の指導の仕方がわからない」という声に対して、具体的な事例や既存のツールを紹介していただいたことで教員の情報モラル教育への意識の高揚につながった。

## 3 校内での情報モラル教育を取り入れた教科等横断的な実践

### (1) 道徳科の授業での実践

道徳科の授業では、「SNSノート」の「自分と相手とのちがい」を参考にして、「カード分類比較法」を用いて、授業を行った。生徒からは「価値観は、人それぞれで、自分の価値観を押しつけてはいけない」や「人それぞれ価値観があるから自分が良くて相手も嫌なときがある」という意見が出てきた。

人それぞれ、いやなと思うことや、うれしいと思うことはそれぞれあるので、相手の気持ちをしっかり考え、行動していく必要があると思った。



自分が持っている固定かいはんが正しいとは限らなないの  
相対に この様なやりとりはとても大事だと思った。  
言葉に気をつけて話したいと思った。

## (2) 数学科の授業での実践

数学科の授業では、データの分析と活用の単元で「スマホが学力を破壊する（集英社新書）」のデータをもとに分析する授業を行った。実際のデータを見て、「スマホの使いすぎは、学力が低下する」という気付きや「スマホの利用が1時間の人は、時間の管理ができるから学力が高い」といった分析を行った。



## Ⅲ 成果と課題について

### 1 成果

- SNSやオンラインゲームを使用し、情報を発信する際には、人を傷つけたり、不快感を与えたりするなどのリスクがあり、責任が伴うということを理解することができた。
- SNSのトラブルやオンラインゲームのトラブル事例などを、自分事として捉えることができるようになった。
- SNSやオンラインゲーム内でのトラブルの減少につながった。
- 情報を受信したときに、その情報が本当に正しい情報なのか、そうでないのかの取捨選択する力が身についた。
- 年間指導計画の作成や校内研修の実施、SNSノートの周知をしたことで、教員の情報モラル教育に対する意識の高まりが見られた。
- 学校と保護者との情報モラルに対する認識の差はまだまだ大きいですが、保護者を巻き込みながら（授業参観や保護者対象の講演会など）取り組んできたことで、徐々に保護者の意識が高まってきた。

### 2 課題

- スマートフォンやゲームなどの使用時間は未だに長い傾向があり、今後、さらに情報モラル教育が必要である。特に、タイムマネジメントについての実践が必要である。
- 前期課程と後期課程とのつながりがある義務教育学校の特色を生かして、情報モラル教育の充実を図るために、国語科や数学科、技術科などの特定の教科だけでなく、各教科での年間指導計画の作成と実践の累積を図りながら教科等横断的に進めていきたい。